赤尾さんの思い出　木田 宏

赤尾さんは、昭和の時代の立志伝中の一人に数えられていい人であると考える。昭和6年学校を卒業するや旺文社を創設し、教育出版を業として、同社今日の隆盛を築いた。今日の出版界において、教育出版の占める大きさには目を見張るものがあるが、赤尾さんは、戦前つとにその魁を勤め、教育出版はもとより、出版界の発展に寄与した人である。

赤尾さんは、大変な読書家であった。その数多くの本に教えられたことを、次の世代に分かち与えようとして、出版事業に打ち込まれたのではなかったであろうか。出版は、事業規模として必ずしも大きなものではない。それを、戦前、戦後の激動期を通じて、築いてこられたのは、大きな信念に貫かれたからであり、また、大変な艱難辛苦を嘗められたに違いない。それを雄弁に物語るものに、赤尾さんの記された「忘れられぬ名言」という著書（昭和47年）がある。

心の支えとなり、仕事の助けにもなり、「いわば人生を生きぬく知恵と勇気と慰めとを与えてくれた」とされるこの名言のひとつひとつを見ていくと、その言葉によって磨かれた赤尾さんのお人柄が髣髴として浮かび上がってくる。また、その読書の範囲が、古今東西の先哲にはば広く及んでいることに、改めて感嘆の念を覚えるのである。

そしてその自らの身につけたものを少しでも若者に分かち与えたいという気持ちが、その事業に、また、折々に書き連ねられた言葉に、よく表されている。「私は思うのである。人間の価値というものは不幸のときに最も良くわかるものである。幸福なときにりっぱなのは当然なのである。敗北したとき、大病になったとき、大きな過失を犯したとき、こうしたときにほんとうに自力のある人、信念のある人、勇気のある人は更に勇気を鼓して捲土重来するものである。」（若人におくることば　昭和49年　103ページ）と入試に失敗した者に励ましを与えているのは、その一例である。

ご自分も苦労が続いたのであろうが、努力して人生を切り開いていこうとする若人に少しでも手助けをしたいという気持ちが、教育出版事業をこえて、社会教育の諸事業に手を伸ばしていかれたのであろう。昭和24年から、文部省認定通信教育協会を組織し、社会通信教育の普及啓蒙に終始努力された。英語の通信教育から、実用英語能力の普及向上を目指して、英語の技能検定を創始し（昭和36年）、日本英語検定協会の今日の隆盛をもたらされた。次いで始められた書写技能検定（昭和38年）についても、同じ思いが込められていると思うのである。

赤尾さんとの公私にわたるお付き合いを深くするようになったのは、昭和41年、社会教育局を担当するようになってからだと思う。社会通信教育の普及発展に力を注ぎたいと考え、社会通信教育と緊密な接触を持ち、会員の拡充、受講者の拡大に意を用いてみた。幸いに順調な発展を遂げ、受講者も急激な増加をみることができた。

さらにご縁が深かったのは、教育放送、教育テレビの関係であった。社会教育の諸事業に実践してこられた赤尾さんは、早くから、教育における放送の重要性に着目され、放送による受験講座、英語教育などを行ってこられたが、昭和32年発足した日本教育テレビ（今日のテレビ朝日）の社長に選任されて、教育専門局を商業ベースで経営するという困難な事業を担当された。折角の教育専門局が市民の教化、啓蒙に意義深い活動を展開して貰えるよう、文部省としても教育放送の充実に工夫をこらしたことは、言うまでもない。

私が社会教育を担当した時は、会長に就任しておられたが、教育放送の実情やその将来について、いろいろとご教示を頂いた。そして、民間放送局各社の教育番組の水準を高め、制作担当者の研究協力体制を整えるため、32社の参加をえた民間放送教育協会を財団法人として発足させたことが忘れられない。このことについては、直接そのことに当たられた当時の専務岩本政敏氏（現文化放送会長）の大変な努力を多としなければならないのであるが、既存の放送系列を越えた画期的な全国教育放送網が生まれたことは、教育放送に深い理解をもってこられた赤尾さんが、日本教育テレビの会長であったからにほかならないと思うのである。

文部省はこの放送網を通して、「賢い消費者」「親の目子の目」といった家庭教育番組を委託してきた外、テレビ局と視聴者との対話の場を広げてきた。また、放送教育開発センターによる「テレビ大学講座」も同協会に委託され、放送大学開校への諸準備も進められた。このように考えてくると、今日の教育放送の取り組の中に、赤尾さんの教育放送に寄せられた心意気が、いまも息吹いていると思われて来るのである。

このような仕事の上でのお付き合いをつうじて、ご家族の方々とも、家族ともどもお近づきを頂けるようになった。「忘れられぬ名言」の中に、「年老いて思い出のない人生は不幸である」（トルストイ）と見えている。言葉の意味は少し違うようであるが、赤尾さんを思い出の中に持つことができることは、我が身の幸せであると思うのである。

（財・日本学術振興会理事長）